

— 資 料 —

高齢者に対応した戸建住宅の居住者評価

本 保 弘 子

Resident's Evaluation on Designing the Detached House for the Elderly

Hiroko HOMBO

要 旨

築6.5年を経過した高齢者対応戸建住宅の居住者評価を検討した。その結果、設計マニュアルにはなかった設計と住宅設備機器の選択に関する注意点が明らかとなった。

キーワード：バリアフリーデザイン barrier free design, 高齢者 elderly
設計ガイドライン design guideline, 戸建住宅 detached house,

1. はじめに

高齢者夫婦が終の棲家とする住宅の設計依頼を受け、長寿社会対応住宅設計マニュアル戸建住宅編¹⁾ (以下マニュアルと記す) を参考として設計を担当した。その設計の概要に関しては、『高齢者対応の戸建住宅の設計について』²⁾ で報告した。

築6.5年を経過した2005年9月、マニュアルの有効性の再検討、設計の検証のために居住者への聞き取り調査、家具配置の採取、現況写真撮影を実施した。その結果を報告する。

2. 居住者の状況

調査時点では夫は79歳、妻は75歳であった。新築から調査までの6.5年の間に夫は病気入院を経験した後、外出が少なく自宅で過ごす時間が長くなった。体力の低下を実感しているようだ。妻の健康状態と生活状況は以前と変わらない様子に見えたが、電車などを利用した遠方への外出は腰痛のもとなので最近控えているという回答であった。

3. 部屋の使い方と家具配置

部屋の使い方と家具配置を図1. に示す。

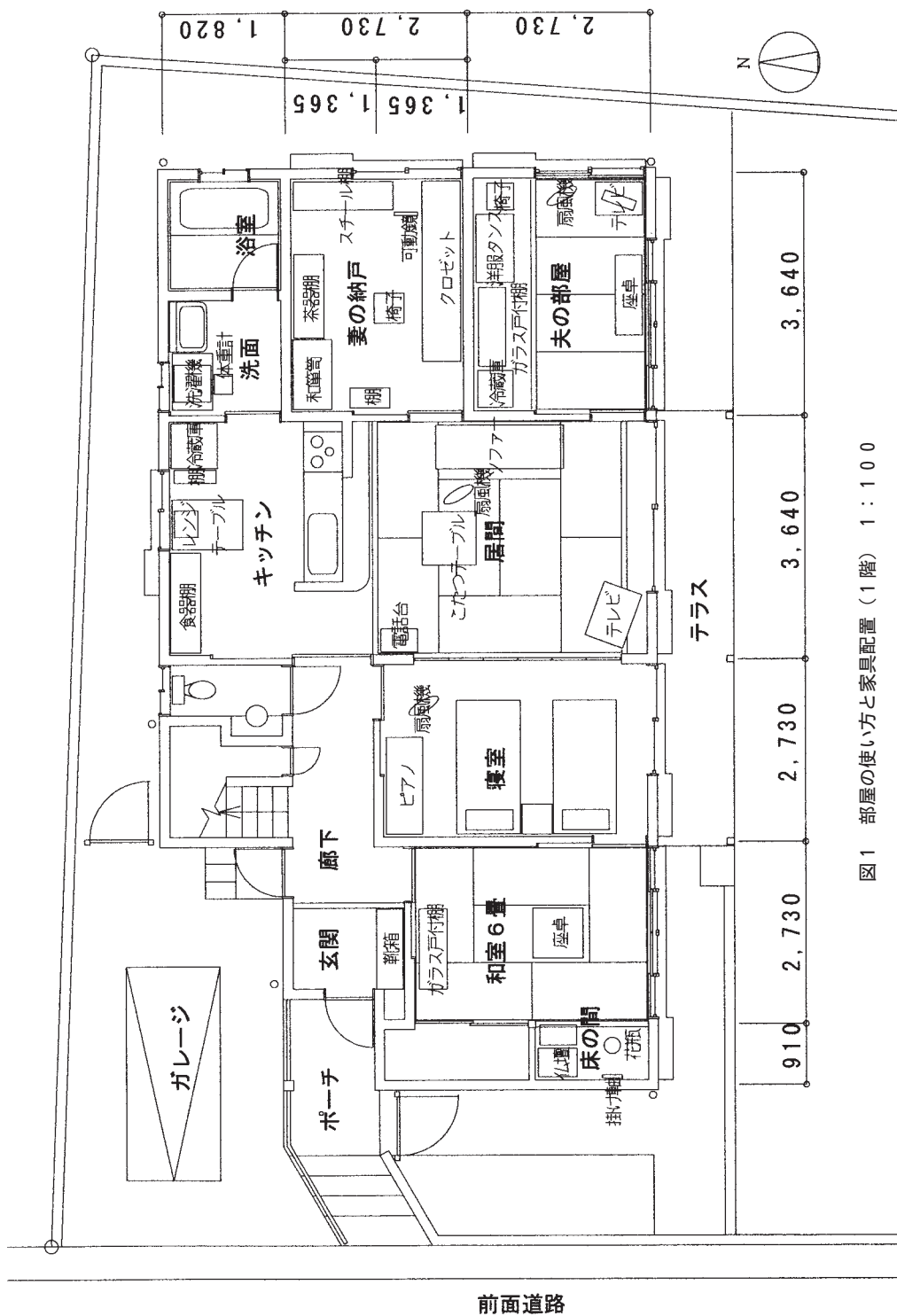


図1 部屋の使い方と家具配置 (1階) 1 : 100

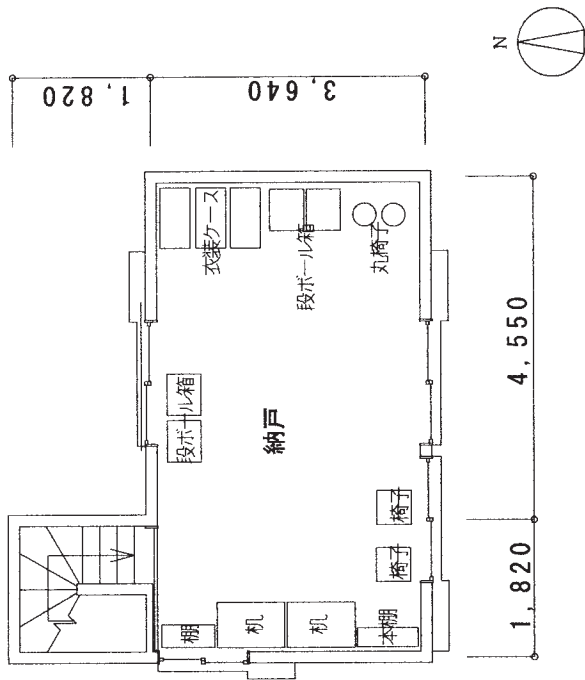


図1 部屋の使い方と家具配置 (2階) 1 : 100

(1) 居間（写真1，写真2）

日中，主に居る場所である。この部屋での生活行為としては食事，休息，昼寝，テレビを見る，洗濯物の整理等の家事，読書，勉強（英語，パソコン）などをあげ，自立した生活を楽しむ様子が伺えた。冬はこたつとなるテーブルを長年使用し，これを食事用テーブルとしている。設計時には椅子座の生活を勧めたが，食事を含む居間の生活に椅子座は受け入れてもらえなかった。対面式キッチンのカウンター下に棚が置いてある。これは妻が定位置に座ったときの背もたれとなり，日常よく使う物の収納に便利で都合が良いようだ。扇風機をこたつテーブルの横に置いて使っている。エアコンの長時間使用は気分が悪くなるため室内が30度を超える暑さの時に短時間使うだけで，扇風機の方がよく使うそうだ。壁に沿って置かれているソファはよこになれる大型サイズのもので，時々，夫の昼寝に使われる。



写真1．居間から夫の部屋，妻の納戸を見る



写真2．居間から対面式キッチンを見る

(2) ダイニングキッチン

7畳大の広さがあり、食事もできるように設計したが、ここを食事には使っていない。食事用テーブルはあるが、電子レンジと調理器具、調味料などが置かれ食事には全く使われていない。床面は庭で収穫した野菜の置き場所となることが多いそうで、調査時にはたまねぎが並べられていた。食事以外のこのような使い方のため、広さは適当という評価であった。対面式キッチンは作業中にテレビが見える、居間にいる人と話ができる点は評価が高い。困った事としては、大事には至っていないが、ガステーブルのグリルの消し忘れがあったようだ。上面がガラスでグリル部分の着火と消火が見える物が欲しいそうだが、そのようなガステーブルは見つからない。高齢者対応の様々な機器に関して、ONとOFFがよくわかる物が推奨されているが、ガステーブルに関しては現在そのような商品は見つけることができない。消し忘れ対策として、一定時間で自動消火機能付のガステーブルか電磁調理器に変えることを検討中である。



写真3. 夫婦寝室

(3) 夫婦寝室（写真3）

この住宅で夫婦は初めてベッドを使う生活を選択し、シングルベッドが二つ置いてある。慣れると和室にふとんよりベッドの方が良いと答えた。ピアノも置いてあり、あまり使わないが定期的に調律を依頼し大切にしているようだ。この部屋にも扇風機を置いて、居間と同様エアコンよりよく使うようだ。

(4) 夫の部屋

冷蔵庫とテレビのある専用の部屋は、窓側に座卓を置いて書斎として使っている。昼間は居間と同じくらいの時間を過ごす部屋であり、専用の一人になれる部屋があることの評価は高い。ここもエアコンは設置してあるがあまり使わず、扇風機の方がよく使うようだ。

(5) 妻の納戸

妻の趣味である社交ダンスの衣装やその他の衣類収納、更衣の部屋となっている。中央にイスを置き、時間をかけて衣装を選んだり着替えたりすることもあるようだ。居室ではなく納戸

であっても妻専用の部屋があることの評価は高かった。

(6) 和室 6 畳 (客間)

床の間の半分を仏壇置き場としている。仏壇にはお供えをして毎日手を合わせているので夫婦寝室から出入りできることの評価は高い。時々親戚が来て、たまに泊まることもあり客間としても使われている。

4. 共通事項の評価

(1) 部屋のつながり

各部屋の配置については、満足しているという回答が得られた。

対面式キッチンと和室の居間をつないだ事の評価は高かった。

住宅の通路形式としては、廊下が短く居間中心型平面である。居間が妻の納戸、夫の部屋、夫婦寝室への通路となっていることに対しては便利であるというプラス評価であった。居間が落ち着かないというマイナス評価はなかった。これは、ソファとテレビを置く位置には壁があることに加えて、夫婦寝室との間は2枚一組の折戸を閉めればそれが壁の役割となり、床座生活では対面式キッチンのカウンター下は壁に近い感覚で受け入れられた結果だと考える。(写真2) 壁量とその位置に配慮すれば、居間中心型平面に対して、部屋の落ち着きを重視する高齢者の評価は高い。

夫婦寝室は前述のように居間と折戸でつながる他、トイレ前の廊下と6畳和室にも出入できる引戸がある。これは行き来が便利である事に加えて風通しが良いことが好評であった。

(2) 段差と手すり

居住者2人は、この6.5年の間に住宅内でのつまずきや転倒によるケガを経験していないので、段差と手すりと滑りにくい床材に関する配慮は新築から調査時点までは適当であったと言えるようだ。基本生活空間を配置した1階部分の屋内は、玄関の上がり框と浴室出入口を除い



写真4. 階段の手すり

て段差はない。2階の物置への階段は、勾配にそった手すりと中央の方向を変える部分の垂直の手すりをつけた。(写真4) マニュアルには方向を変える部分の手すりに関して記述はない³⁾が、この垂直の手すりに対する評価は高かった。

新築の時に、玄関の上がり框部分、トイレ内部、浴室内部の3箇所に関して手すりの設置を勧めたが、かえって負担に感じるという理由で、当時は理解が得られず設置していない。現在も特に必要ではないそうだが、「手すりがあれば、そのうち使うかもしれない。」と答え、手すりの必要性に対する見通しはかなり変化した。

(3) 通行幅

浴室部分でマニュアルの基本レベルのやむおえない場合の寸法、その他はマニュアルの推奨レベル⁴⁾を十分にクリアしている。通行幅の評価は適当と回答した。

(4) 建具

居室の全ての屋内出入口は開閉操作に伴う体の動きが少ない引戸とし、彫りこみ取手、100mmの引き残しをとり安全性を高めたことの評価は良かった。しかし非常に使い難いという評価が1箇所あり、それは居間の掃出し窓で、断熱性の高いペアガラスのアルミサッシを幅1300mmで2枚入れた部分であつた。夫婦二人とも腕の力が弱くなっているため、ペアガラスで幅が広いと非常に重くて開閉が困難なため、残念なことにテラスと庭への出入りにここを使わず玄関から回っているようだ。ペアガラスの選択は良かったと思うが、日常の出入り口部分は開閉の負担が少ない幅600mmのサッシとすべきであつた。

(5) 設備

『3. 部屋の使い方と家具配置』でエアコンとガステーブルについて述べた。その他の設備で問題があつたのは、照明器具の選択であつた。電球の交換が楽なペンダントタイプを多く選択したが、トイレのダウンライトは内部横方向に電球が付きその取り替えは楽ではない。照明器具の選択にはメンテナンスが安全かつ容易であるという条件に配慮したつもりであつたが、電球の取り付け方向までは確認しなかつた。

5. 居室以外の空間別設計事項の評価

(1) 洗面脱衣室、浴室、トイレ

夫婦の強い希望で、マニュアルの推奨レベル⁵⁾の広さと手すり、段差なしの浴室は採用しなかつた。この三か所のバリアフリー設計はマニュアルの基本レベルまたはやむおえない場合のレベル⁵⁾に留まっているが、現状で不便は無いようだ。

(2) 廊下

有効幅員はマニュアルの推奨レベル800mm⁶⁾を大きく超える1250mmあり、これに対しては適当という評価であつた。車で買物して帰宅時に物を置くスペース、台風がよくくる地域なので物干竿などテラスにあるものを置くスペースとしての便利さを評価した。

(3) 2階納戸

2階納戸は机、椅子、衣装ケース、ダンボール箱が置かれていた。設計当初の利用目的であった2階から庭など屋外を眺めるというのは最近あまりしていないようだ。しかし広い納戸は、住宅内が片づくので気に入っていて便利という評価であった。

(4) 屋外スペース

玄関アプローチと勝手口ドア前には手すり付階段がある。スペースにゆとりがあり新築時にスロープの設置を薦めたが移動距離が短い階段を妻が選択した。調査時点でも特にスロープの必要はないようだ。

テラスと庭は250mmの段差があり夫婦はブロックを置いて対処していて不便ではないそうだが、上り下りの安全性を考慮すると、テラスと庭の間に1段造って手すりも設置すべきであった。

6. まとめ

築6.5年を経過した高齢者対応戸建住宅の居住者評価を検討した。その結果、マニュアルにはなかった設計と住宅設備機器の選択に関する注意点が明らかとなった。

- (1) 居間が各部屋への通路を兼ねる居間中心型の平面プランは、壁の位置等で部屋の落ちついた雰囲気配慮すれば評価が高い平面型となる。
- (2) 建具の選び方は、腕の力が弱くなった高齢者が容易に開閉できる物を選択する。例えばペアガラスで幅が広いものは重いので、高齢者対応住宅での選択は慎重であるべきだ。
- (3) 階段の方向を変える部分には基本レベルでも垂直の手すりを付けるべきである。
- (4) テラスと庭の段差が200mmを超える場合は、基本レベルでもテラスと庭の間に段を設置して手すり付とすべきである。
- (5) 加熱調理器具は電磁調理機よりガステーブルが好まれるので、自動消火機能が付き、グリル部分のONとOFFがよくわかるガステーブルを選択したい。
- (6) 照明器具は電球の交換が楽であることを確認して選択する。ダウンライトは電球の取付方向が横のものは避ける。

引用文献

- 1) 建設省住宅局住宅整備課監修, 長寿社会対応住宅設計マニュアル戸建住宅編, 高齢者住宅財団, pp. 14-117 (1995)
- 2) 本保弘子, 高齢者対応の戸建住宅の設計について, 神戸女子短期大学論叢, 45, pp. 133-140 (2000)
- 3) 建設省住宅局住宅整備課監修, 長寿社会対応住宅設計マニュアル戸建住宅編, 高齢者住宅財団, pp. 85-91 (1995)
- 4) 建設省住宅局住宅整備課監修, 前掲書, 高齢者住宅財団, pp.49-51 (1995)
- 5) 建設省住宅局住宅整備課監修, 前掲書, 高齢者住宅財団, pp.92-107 (1995)
- 6) 建設省住宅局住宅整備課監修, 前掲書, 高齢者住宅財団, pp.81-84 (1995)